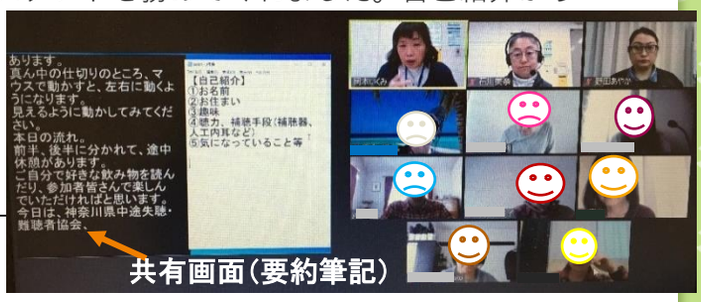
News Letter
神奈川県聴覚障害者福祉センター

きこえ支援情報館

Vol. 02
発行／2021年3月1日　神奈川県聴覚障害者福祉センター補聴相談室

オンライン難聴者サロンを開催しました

難聴者サロンは、現役世代を対象に情報交換、交流、困りごとの相談、趣味の話など気楽に話せる場です。今年度最後の難聴者サロンは令和3年1月31日に開催しました。緊急事態宣言が発令されているなかでしたので、オンライン(ZOOM使用）での開催となりました。神奈川県中途失聴・難聴者協会の石川美奈さんが進行、野田あやかさんがアシスタントを務めてくれました。自己紹介から始まり、〇×クイズで場が和み、フリートークではさまざまな話題が出ました。



共有画面（要約筆記）

「健聴者との**コミュニケーション**どうしてる？」については、場によって、手段を使い分けるという話がありました。大事な場面では、要約筆記(文字通訳)グループトークやフリートークでは、手話(通訳）、自分から話しかける時は、UDトークなどの音声認識アプリを使う、筆談をお願いするなどです。また、周囲の人に助けてもらう、自分がきこえにくいことをカミングアウトする。コミュニケーションの方法は一つではないのですね。また、きこえを助けるMリンクを使う。電話はどうやっている？見える電話って実用的なの？電話リレーサービスが公的に始まります、障害者差別解消法という法律があるから、企業や公的機関は配慮する義務がある、などたくさんの情報があり、趣味の話も楽しかったです。詳細はここで書ききれませんので、関心ある方は、キーワードから調べたり、センターにお訊ねください。次回は、6月に予定しています。要約筆記などの情報保障がありますので安心して、ぜひ、ご参加ください。

第6回きこえにくい人のための「コミュニケーション講座」（zoomにて）開催

令和3年2月20日　体験談（２）
神奈川県中途失聴・難聴者協会会員
能勢江美子氏のご講演

テーマは「私の聞こえ取り扱い説明書」
自分の聞こえのことを周りに伝えても時間が経つと忘れられてしまう。それならいつでも読んでもらえる自分の聞こえの説明書(トリセツ）を作って渡そうと考えたそうです。トリセツを作成して、自分を客観的にみること、伝えることの大切さ、お互いに歩みよることを学んだとのことでした。また、今、コロナ禍で、オンラインでの会議などが増えている。直接対面していれば、その都度、相手にお願いしなければならない心理的負担がオンラインなら軽減される。しかし、実際の人との関わりの中では職場の先輩に教えられたと言います。障害の有無、難聴か健聴か、に関わらず、相手を気遣うこと、自分から働きかけること、お互いに尊重し合うことが大切なのだと。3歳の息子さんとの関わりでは、自分が難聴だということをさりげなく伝えている。自分が知らない音を息子さんが教えてくれるのだそうです。息子には多様性を認め、他者を理解し尊重しあい生きてほしいと母親の顔が垣間見られました。自分の母親がいつでも難聴の自分を肯定してくれていたことが生きる土台となっていることを子育てをしながら思い出すそうです。できないことを難聴のせいにしない、難聴だからできることを増やしていきたいというのがとても印象的でした。

補聴相談室からあれこれ

「音はきこえるけど、ことばがはっきりききとれない😥」

補聴器や人工内耳を使っている方で、「音はきこえるけど、ことばがはっきりききとれない」と訴える方が非常に多いです。これは、ことばを正確にききわける力(語音弁別能または語音明瞭度という）が低いことが多いためです。検査をすると「か」が「あ」にきこえたり、「た」が「か」にきこえたりする場合があります。どのくらい正確にきき取れたかを％で表します。これが補聴器や人工内耳を使っても、なかなか100％にならないのが現実です。そのため、上記のような訴えになるのだと思います。だからと言って、補聴器や人工内耳が意味がないと言っているわけではありません。普段のコミュニケーションでは、たとえ、きこえる人でも一字一句すべて正確にききわけているわけではありません。その場の話題、文脈、相手との関係、それまでの経験、知識を使って頭で補いながら理解して会話をしています。
この検査で、正解率が低いとがっかりされるかもしれませんが、検査の音は、日常生活上の音をそのまま再現しているわけではないので、一つの目安にされるといいと思います。ご自分のきこえ方を理解し、間違えの傾向を知っておくと、コミュニケーションする上で助けになるかもしれません。